

觀世流

雜子謠大成
春

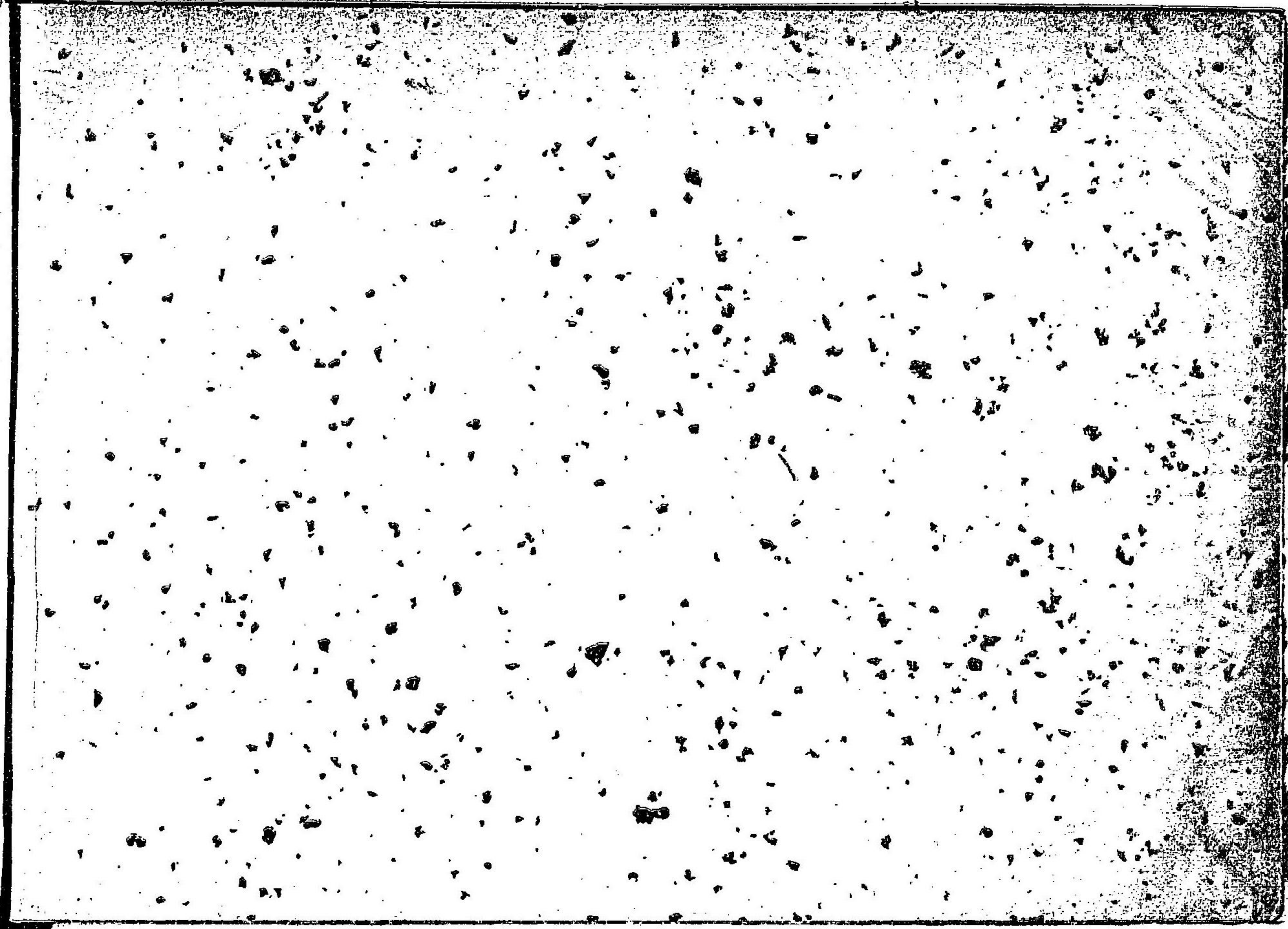
6

328

6-328

宗家
觀世
心

明治
43. 2. 24



緒言

雜子論本ハ絶版ナリ

再刊行セリ

雜子論ハ舊雜子也又古今

多ク用ヒざルモノ有リ依テ這

般出版セシ物ハ二百餘番高砂

行順次悉ク抜萃一且前々有

處ハ其初々セシ書題一雜子

方手附乃辨となせり故母大小鼓



予附焉亦極く便利なり

謠曲の字をより大方に便を計り

節付乃缺點を補ひ緻密なり

本流に直し改加へる事

著者識

雜子謠

春日次

高砂	一	田村	三
江口	六	斑女	八
鶉飼	九	雜波	十一
兼平	十五	千手	十七
幸都樂町	十九	紅葉狩	二十
老松	二十四	粧政	二十六
井筒	二十九	三井寺	三十一
天鼓	三十四	白樂天	三十七
安威	三十九	楊貴妃	四十二
玉葛	四十四	融	四十七
養老	四十九	清經	五十三
采女	五十六	通小町	五十八
小袖曾我	六十一	竹生鳩	六十二

造萬物乃こもるひあり葉の林乃東
風よこまむ枝の虫乃北もあやめく
も皆和奇乃姿あしびわ中あきし此
松萬才よ勝まて十松あより初
子枝の緑をなして古今乃色をいづ
始皇乃声爵あつる程の本あり
とて吳國がも本朝あそ方民いさを
賞就き 高砂乃尾よりか程あ
多しあり曉かきく霜へたきども
松が枝の枝の同い葉みよりまよ
陰の胡夕あけた落葉のあまのき

葉あり松乃よの教う勢ぞて色
あはて本乃うづあざ世のあまの成
もあまのい本乃中あまの名いさあま
葉付乃なりあも相生乃松ぞあて
たまにうまの松枝のく若
本乃昔あつる其あまの葉あ
や今も行さつるいもあまのあ
佳乃江の相生乃松の精ぞ婦と現
葉のいりあもあまのあまの松の
奇好と願してあまのあまのあ
あまのあまのあまのあまのあ
あまのあまのあまのあまのあ

日... 我大君の國あはれ... 思ひ代

昔... 思ひ代... 思ひ代

海... 思ひ代... 思ひ代

海... 思ひ代... 思ひ代

高砂... 思ひ代... 思ひ代

月... 思ひ代... 思ひ代

拍... 思ひ代... 思ひ代

西... 思ひ代... 思ひ代

神... 思ひ代... 思ひ代

月... 思ひ代... 思ひ代

松... 思ひ代... 思ひ代

乃... 思ひ代... 思ひ代

乃... 思ひ代... 思ひ代

乃... 思ひ代... 思ひ代

乃... 思ひ代... 思ひ代

乃... 思ひ代... 思ひ代

乃... 思ひ代... 思ひ代

乃... 思ひ代... 思ひ代

乃... 思ひ代... 思ひ代

乃... 思ひ代... 思ひ代

乃... 思ひ代... 思ひ代

神乃も天よりま地は満て萬丈をい

ぶカサリイウ動搖せりカサリイウは鬼神も怖まきを

昔も去たれありちるしひ一運居

よは入一鬼もは位と首らて天討せしち

さカサと捨れむるさびきさカサと

やまらカサかカサ鈴鹿山カサ振放カサれ伊勢

乃海くカサあカサげカサ松原村カサさカサめカサのカサ鬼神

のカサ鐵火カサさカサつカサのカサ教カサ子カサ誇カサよカサ

さカサまカサらカサてカサあカサらカサみカサしカサきカサのカサ敵カサよカサ

あカサれカサもカサあカサらカサみカサのカサ味カサ方カサ乃カサ軍

兵の旗乃よは千手観音乃ぞんとあつて

座乃よ能行カサ千は手毎カサ乃悲乃

ろカサよカサ智恵乃カサまカサあカサつカサ度カサあカサらカサ

千のカサもカサあカサらカサみカサのカサさカサらカサひカサてカサ鬼

れカサれカサ入カサよカサもカサ落カサしカサてカサくカサもカサ夫

先カサまカサつカサてカサ鬼カサ祓カサめカサあカサらカサむカサはカサむカサもカサ

のカサ有カサ給カサくカサやカサ伽カサらカサんカサ咀カサ諸カサ毒カサ藥

念カサはカサ観カサ音カサのカサちカサとカサあカサをカサせカサてカサもカサあカサら

ちカサ還カサ着カサ於カサ本カサ入カサ則カサ還カサ思カサ於カサ中カサ入カサ乃カサ敵

もカサ七カサひカサアカサもカサるカサ是カサ観カサ音カサのカサ力カサあカサら

口

あカサらカサみカサ入カサ半カサ天カサのカサ罪カサ果カサあカサらカサむカサんカサ

お紋の風鏡のまじりて陸縁の波

のまじりて目も霞の浪のたつた

あまのたつた霞の浪のたつた

あまのたつた霞の浪のたつた

あまのたつた霞の浪のたつた

あまのたつた霞の浪のたつた

あまのたつた霞の浪のたつた

あまのたつた霞の浪のたつた

あまのたつた霞の浪のたつた

あまのたつた霞の浪のたつた

あまのたつた霞の浪のたつた

あまのたつた霞の浪のたつた
あまのたつた霞の浪のたつた
あまのたつた霞の浪のたつた
あまのたつた霞の浪のたつた
あまのたつた霞の浪のたつた

如女

あまのたつた霞の浪のたつた

あまのたつた霞の浪のたつた

あまのたつた霞の浪のたつた

あまのたつた霞の浪のたつた

あまのたつた霞の浪のたつた

あまのたつた霞の浪のたつた

あまのたつた霞の浪のたつた

海國より舞臺に花をばらばらと散らす

く月影をばらばらと散らす

昔樂乃花をばらばらと散らす

世に誰よりひさしきものありては

は南枝花初て用へば西の海

舟に難波のまはりては

浦乃浪をばらばらと散らす

多路ありては

花はかたのやうに散らす

海國より舞臺に花をばらばらと散らす

舟に難波のまはりては

徳乃舟をばらばらと散らす

海國より舞臺に花をばらばらと散らす

舟に難波のまはりては

徳乃舟をばらばらと散らす

海國より舞臺に花をばらばらと散らす

舟に難波のまはりては

徳乃舟をばらばらと散らす

海國より舞臺に花をばらばらと散らす

舟に難波のまはりては

たなは浄僧あり 行かろ 町

かきん 雨の音は 町

行かろ 現の音は 町

町 野の音は 町

あはれ 草の音は 町

五月雨の音は 町

あはれ 草の音は 町

人さし 草の音は 町

とら 押れ 草の音は 町

て 草の音は 町

中あも 珠の思の 草の音は 町

恨みの 草の音は 町

通せん 日に行 草の音は 町

海路に 草の音は 町

り 草の音は 町

浄夜の 草の音は 町

かきん 草の音は 町

あはれ 草の音は 町

雨雲の 草の音は 町

も 草の音は 町

二夜三夜 草の音は 町

乃月ノツキの第ダイ會カイもあそそアソソるルかよカヨふ
庭ニワよりヨリ此ココ時トキもモうウのノ曉トキヨミのノきキ乃ノ
もモ一ヒト日ヒ夜ヤもモあアそソそソひヒそソ九ク
十ジュウ九ク夜ヤよヨちチのノきキ 幸サイハシあアらラまマあア
目メもモひヒやヤ胸ムネらラぬヌわワとトあアらラひヒて
一ヒト夜ヤとトもモうウとトあアらラまマあアらラまマ乃ノ
ササおオのノ其ソノ怨ウラミ念ネン入イらラまマうウまマうウしシてテはハ根ネ
よヨおオりリおオもモいイふフいイふフいイふフいイふフいイふフいイふフ
そソのノなナらラぬヌのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキ
砂スナとトきキこコのノきキこコのノきキこコのノきキこコのノきキこコ
こコもモあアらラまマあアらラまマあアらラまマあアらラまマあアらラまマ
のノきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキ

紅葉狩

林ハヤシ間マ酒サケをヲあアらラまマうウてテはハ紅ベニ葉ハをヲたタく
とトもモ交マシ面オモ自ミやカあアらラまマうウてテはハ紅ベニ葉ハのノよヨ
むムけケ送オウがガ一ヒト袖スベテもモ紅ベニ葉ハ夜ヤ乃ノ
くクれレおオ井イ深シきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキ
たタ思オモひヒもモ胸ムネうウちチちチわワくク計ケなナりリ
なナらラまマあアらラまマあアらラまマあアらラまマあアらラまマあアらラまマ
のノきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキ
のノきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキ
のノきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキのノきキ

此まに忍行を流すも和と神
詭乃づををきりぬ。松尾も梅も
死にまを對らう。めでたきれ

頼政

美作治義乃夏の比よ。あき清謀叛
をくそめす。あきもさ。倉の宮の口も井
乃くも。有明の月のあきもあき
し。時をよ。江路や三井寺はうて
ねらぬ。去程の平家。射く
は。救萬騎乃兵を。開乃東は。遠く
あき。音羽乃山つ。山科乃里と

本橋の関を。うらま。みく。夏。うらま
せ。うらま。うらま。乃河橋打渡り
大和路指て。夏。寺と。うらま
の。開。路。れ。うらま。うらま。うらま
六度。うらま。うらま。うらま。うらま
あり。うらま。平。等。院。うらま。うらま。うらま
ま。入。つ。うらま。橋。乃。中。の。開。れ
ま。うらま。うらま。うらま。うらま。うらま
を。うらま。うらま。うらま。うらま。うらま

去程は源平れ兵。うらま。うらま。の。南。が。の。岸

頼入てさびぬし橋たやれおとさ欄
 て戦よあひむも岡井の浄妙一頼法
 師敵陣方れちよおぼひかて平家れ
 大勢橋よひらさ水たなうらもそが
 藤野のたけあまなふたあし後たて
 幸しつゝもあさゆし海へ田原れ又た弟
 忠徳とちよまきへちうらうら乃を陣我
 あつしながのつちあ入を三百金持
 うらたぎるを注いけ水よびくもたぢ
 うべしおの村専の廻れあはう羽

ちとせむすへて自ぬかへちいも
 り思ふにふしすてしちち思
 づいりさるさるは水の巻
 大いりかくるおとさしは
 せりいりしおとさしは
 だぐひよかを合はる人れた
 然よよわてのうらうらしたけあせ
 一掃も流を此方乃君よためてあが
 此は此方乃勢は我あが踏もためで
 半町計そよちまがしちうら

揃へく愛を寂びし戦より去程
入乱世抑もく我の頼政が
たのこゝ兄弟の者もせんそと
かたけけと期をこゝら
老半老れ 聖もく御の
平等院乃庵の西門をせん
扇と赤敷よりひのそ捨たし細て
刃と扱あぐらしく
埋本乃花も
乃師さく
なまへけし僧

ともいも徳せう種の縁より後扇の
兼代あつたの
ふ

井筒

易其以紀乃有常乃娘と愛つ兼首の
あ
川
給ゆ
お
あ
ア

たのみのあはれをいふは、
 此國よ、信人の有きも、
 門の前を、
 水鏡面を、
 目も、
 乃露の草の、
 つ井筒が、
 夫れ、
 一、
 まゝ

わき髪も、
 あへん、
 井筒の、
 此の、
 お話、
 衆れ、
 紀乃有、
 山より、
 まや、
 紀乃有、
 女も

甲 寺乃鐘もほのたんと月も古寺

乃松風やたそよみの夢も破れく

光よきりゆめなほあまきくわ

三十一 寺

の鐘もほのたんと月も古寺

乃松風やたそよみの夢も破れく

光よきりゆめなほあまきくわ

諸行無常としりあう 後夜の

鐘とつく時 是は鐘法を揚音する

晨朝乃ひきま 山崎色 入道

寂滅 為樂と響て菩提乃道の

鐘乃色月も寂そひて百八煩惱は

眠りの夢に夢乃世の迷ひもあう

きたるもなほの鐘は我も云障若

雲晴く真如乃月の歌を詠めれ

アて月をん 支長樂の鐘乃色

光の外よりきぬ 又龍池乃柳の

名へ雨乃中よりう 其亦安中を

よれ人言哉のそや乃らわてま

なと高砂代尾の鐘曉をまてぬ

九霜暁の白くもあまきくわ

おねあまは輝く人 宇治 舞かたはあまのりり

お老人はおもひのこ 宇治 借もて

敷がやと流るる 宇治 水の想ひは草成

て。同乎天の敷 宇治 系行昌傳の

あまの 宇治 法を 宇治 ありて 宇治 ありは

あまの 宇治 有籍 宇治 はき 宇治 初秋の 宇治 あり

あまの 宇治 早三伏の 宇治 夏た 宇治 風一 宇治 輝れ 宇治 秋の

あまの 宇治 空夕月乃 宇治 あり 宇治 照る 宇治 とも 宇治 水滴く

あまの 宇治 して 宇治 波 宇治 怒 宇治 り 宇治 たり 宇治 雲乃

あまの 宇治 岸 宇治 舟 宇治 ち 宇治 あり 宇治 物 宇治 と 宇治 あり 宇治 大 宇治 野 宇治 あり

あまの 宇治 水 宇治 沈 宇治 り 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり

あまの 宇治 海 宇治 沈 宇治 り 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり

あまの 宇治 海 宇治 沈 宇治 り 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり

あまの 宇治 海 宇治 沈 宇治 り 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり

あまの 宇治 有 宇治 籍 宇治 は 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり

あまの 宇治 水 宇治 の 宇治 想 宇治 は 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり

あまの 宇治 成 宇治 者 宇治 は 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり

あまの 宇治 成 宇治 者 宇治 は 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり

あまの 宇治 成 宇治 者 宇治 は 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり

あまの 宇治 成 宇治 者 宇治 は 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり

あまの 宇治 成 宇治 者 宇治 は 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり

あまの 宇治 成 宇治 者 宇治 は 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり 宇治 あり

白樂天

花の香は鳥の水のまの蛙の唐の
 日本への書は波を舟に大和の
 甲の書は讀ありて抑ふ
 せりまのまのたのしき事よる者
 天皇の御書は和國高天寺
 はまじ人のまを舟のまの行書
 梅の香乃書りて鳥まの書初
 陽每朝来不相違本と栢となく文
 字の書は和國の書は十一文字
 乃詠予の書は初陽

花の香は鳥の水のまの蛙の唐の
 日本への書は波を舟に大和の
 甲の書は讀ありて抑ふ
 せりまのまのたのしき事よる者
 天皇の御書は和國高天寺
 はまじ人のまを舟のまの行書
 梅の香乃書りて鳥まの書初
 陽每朝来不相違本と栢となく文
 字の書は和國の書は十一文字
 乃詠予の書は初陽

誰なくもくもくはなせむ。おんまあり

ハ此舞樂の 鼓の浪の音笛の籠

乃今ぞはき舞人のけ射が老の

あまよよはたのくき海は海ひつ海

青樂とまもるやまき乃 四

動の 萬代の山後のづつら

水の海の 浪乃はるその海

青樂 西の海あまき乃 浪乃波

河より 頭出 佳吉のけま

すの 海の ありあは

さいきの ままき乃神のちる

乃あし 経きのも日本を 陸入させ

給り 浦の 立海の 給入

樂天 現 給入

伊勢石清水 賀茂うみ 鹿嶋三浦

飯訪 藝田 安藝の 嚴島乃 明神若

安場 龍龍の 音三乃 娘もやえ

海上の 海音 樂とまひ

給入の 大蛇の 乃曲と

空海の 乃海

女まの 乃海

けい 唐の 乃海

老後の思ひ見よ〜 清きあまの
帯地の錦乃真々ぞく
だ〜 錦乃真々ぞく
みら〜 錦乃真々ぞく
時止〜 人やも〜 清きあまの
文の心あり〜 清きあまの
錦乃真々ぞく
威ハ名と小國の故〜 錦乃真々ぞく
ア〜 清きあまの
よ〜 清きあまの
懺悔の物清き水の産ま〜 清きあまの

を物〜 清きあまの
乃道〜 清きあまの
ま〜 清きあまの
志〜 清きあまの
お〜 清きあまの
光威〜 清きあまの
隔〜 清きあまの
あ〜 清きあまの
く〜 清きあまの
什〜 清きあまの
地〜 清きあまの
ま〜 清きあまの

下 中 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

御書

御書
一、御書
二、御書
三、御書
四、御書
五、御書
六、御書
七、御書
八、御書
九、御書
十、御書
十一、御書
十二、御書
十三、御書
十四、御書
十五、御書
十六、御書
十七、御書
十八、御書
十九、御書
二十、御書
二十一、御書
二十二、御書
二十三、御書
二十四、御書
二十五、御書
二十六、御書
二十七、御書
二十八、御書
二十九、御書
三十、御書
三十一、御書
三十二、御書
三十三、御書
三十四、御書
三十五、御書
三十六、御書
三十七、御書
三十八、御書
三十九、御書
四十、御書
四十一、御書
四十二、御書
四十三、御書
四十四、御書
四十五、御書
四十六、御書
四十七、御書
四十八、御書
四十九、御書
五十、御書
五十一、御書
五十二、御書
五十三、御書
五十四、御書
五十五、御書
五十六、御書
五十七、御書
五十八、御書
五十九、御書
六十、御書
六十一、御書
六十二、御書
六十三、御書
六十四、御書
六十五、御書
六十六、御書
六十七、御書
六十八、御書
六十九、御書
七十、御書
七十一、御書
七十二、御書
七十三、御書
七十四、御書
七十五、御書
七十六、御書
七十七、御書
七十八、御書
七十九、御書
八十、御書
八十一、御書
八十二、御書
八十三、御書
八十四、御書
八十五、御書
八十六、御書
八十七、御書
八十八、御書
八十九、御書
九十、御書
九十一、御書
九十二、御書
九十三、御書
九十四、御書
九十五、御書
九十六、御書
九十七、御書
九十八、御書
九十九、御書
一百、御書

一、御書
二、御書
三、御書
四、御書
五、御書
六、御書
七、御書
八、御書
九、御書
十、御書
十一、御書
十二、御書
十三、御書
十四、御書
十五、御書
十六、御書
十七、御書
十八、御書
十九、御書
二十、御書
二十一、御書
二十二、御書
二十三、御書
二十四、御書
二十五、御書
二十六、御書
二十七、御書
二十八、御書
二十九、御書
三十、御書
三十一、御書
三十二、御書
三十三、御書
三十四、御書
三十五、御書
三十六、御書
三十七、御書
三十八、御書
三十九、御書
四十、御書
四十一、御書
四十二、御書
四十三、御書
四十四、御書
四十五、御書
四十六、御書
四十七、御書
四十八、御書
四十九、御書
五十、御書
五十一、御書
五十二、御書
五十三、御書
五十四、御書
五十五、御書
五十六、御書
五十七、御書
五十八、御書
五十九、御書
六十、御書
六十一、御書
六十二、御書
六十三、御書
六十四、御書
六十五、御書
六十六、御書
六十七、御書
六十八、御書
六十九、御書
七十、御書
七十一、御書
七十二、御書
七十三、御書
七十四、御書
七十五、御書
七十六、御書
七十七、御書
七十八、御書
七十九、御書
八十、御書
八十一、御書
八十二、御書
八十三、御書
八十四、御書
八十五、御書
八十六、御書
八十七、御書
八十八、御書
八十九、御書
九十、御書
九十一、御書
九十二、御書
九十三、御書
九十四、御書
九十五、御書
九十六、御書
九十七、御書
九十八、御書
九十九、御書
一百、御書

一ノ...
 二ノ...
 三ノ...
 四ノ...
 五ノ...
 六ノ...
 七ノ...
 八ノ...
 九ノ...
 十ノ...

内...
 業...
 一...
 二...
 三...
 四...
 五...

一ノ...
 二ノ...
 三ノ...
 四ノ...
 五ノ...
 六ノ...
 七ノ...
 八ノ...
 九ノ...
 十ノ...

自愛の心も、さうさうと、
 深く、深く、深く、
 社大を、おぼへ、
 ところ、あつ、
 せうも、おの、
 じ、
 秋の、
 風、
 秋、
 秋、
 秋、

塩と、
 さ、
 秋、
 秋、
 秋、
 秋、
 秋、
 秋、
 秋、
 秋、

花笑愛の如く 此の世にこそありて

此も雨露の如く 此の世にこそありて

ては花の父母たる雨露の如く 此の世にこそありて

此も此水もあれは乃ち油も此の世にこそありて

結ぶまじ隙か入るの世にこそありて

華と思ふより若の如く若水のみは此の世にこそありて

此の世にこそありて 此の世にこそありて

意まぬくは神君よ 奏びたまはれ

此の世にこそありて 勅使の如く

此の世にこそありて 此の世にこそありて

ナ

此の世にこそありて 此の世にこそありて

此の世にこそありて 此の世にこそありて

此の世にこそありて 此の世にこそありて

此の世にこそありて 此の世にこそありて

此の世にこそありて 此の世にこそありて

此の世にこそありて 此の世にこそありて

此の世にこそありて 此の世にこそありて

此の世にこそありて 此の世にこそありて

此の世にこそありて 此の世にこそありて

揚柳観音菩薩 神とて此の世にこそありて

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

清經

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

水波の音 水波の音 水波の音 水波の音

後乃手枕
新拾
根

根
根

根

根

根

根

根

根

根

根

根

根

根

根

根

根

あはれなる御寶のき

あはれなる御寶のき

あはれなる御寶のき

あはれなる御寶のき

あはれなる御寶のき

あはれなる御寶のき

あはれなる御寶のき

あはれなる御寶のき

あはれなる御寶のき

あはれなる御寶のき

あはれなる御寶のき

信玄一と。御馬七疋。金銀持

り。は。御寶のき。御寶のき。

御寶のき。御寶のき。

御寶のき。御寶のき。

御寶のき。御寶のき。

御寶のき。御寶のき。

御寶のき。御寶のき。

御寶のき。御寶のき。

御寶のき。御寶のき。

御寶のき。御寶のき。

御寶のき。御寶のき。

御寶のき。御寶のき。

同縁も物よへてをせ給入申
 して渡はるる邊の感の人
 心ぞ
 ならん

野舟

野舟の車乃欄の百次通へ
 偽まごころの思の覺しんまごころの車
 のちびりての車のまごころの
 心まごころの車
 の備のまごころの思の覺しんまごころの
 心まごころの車
 だまごころの思の覺しんまごころの
 心まごころの車

舟乃浮世も行く秋月は
 影
 暗き

暗き影の心
 影の心

影の心
 影の心

影の心
 影の心

影の心
 影の心

影の心
 影の心

影の心
 影の心

影の心
 影の心

影の心
 影の心

影の心
 影の心

影の心
 影の心

よ思ふ算業のほのきむのりしり
と當はちり
たが開は終よりうのなをとめあむ
兄弟ちや孝行のたぢりあせ
ぞわーけら

竹生傳

多岐ぞ天女おほしめく
たあふたか現よりり
隔あるきむの
悲れをたこへ
うたは

室か狂疑もあしそ傳の松陰と便
とて社壇のさびしと押し
よ入をほひきれば箱も水の中は
みーが自波はさぬわ秋は海の
さしき
あま
鳴もをうでたを教ひ國の守り
た

諸仏のはぢ言ひけし勝方なきは超世の
悲願普くしきつるは月をきへり

うま程はなほ西よりもの光をまよて

西方よすいりきく為ともや月の彼

めまは右の脇付とて方縁をよほ

道守まなむは羅さかろくもよみぬ

力をうぬ故よ大勢まこりまよす

天冠も同はたまりきりてはれはる

皇は教へ他方へ降たまはるは珠樓

乃風の音なきはしりてはるは

鳥の同はるは身はしりてはるは

あまは舞をたかくてはるは

あまは舞をたかくてはるは

あまは舞をたかくてはるは

あまは舞をたかくてはるは

あまは舞をたかくてはるは

あまは舞をたかくてはるは

あまは舞をたかくてはるは

あまは舞をたかくてはるは

あまは舞をたかくてはるは

秋草の露のさびしきまはらへ
 行し頭へくへ胡蝶のちりり
 昔のまじく神よ入(き)きか
 乃たさ思ひくちすはらさる
 秋のあはれ思ひくちすはらさる
 早にさるるさるるさるる
 接人さるるさるるさるる
 昔さるるさるるさるる
 秋のあはれ思ひくちすはらさる

...

拍子

備世間の幻相を親しむは露の
 乃る前よりさるるさるる
 右より親しむは露のさるる
 始て露へはさるるさるる
 乃るるるるるるるるるる
 乃るるるるるるるるるる
 乃るるるるるるるるるる
 乃るるるるるるるるるる

...

のせめお花のひびきもなげきも昔の衣たか
 ちんねん終よひらきもなげきもなげきも
 出づるあはれ乃らうもなげきもなげきも
 善き社あはれ世はれ恨もなげきもなげきも
 まる〜後あはれし序臨の熱乃細は
 まる〜ひらぬぬもなげきもなげきも

夕月あはれし序臨の熱乃細は
 まる〜ひらぬぬもなげきもなげきも
 伊勢乃細をなげきもなげきも
 伊勢乃細をなげきもなげきも
 伊勢乃細をなげきもなげきも
 伊勢乃細をなげきもなげきも

は諸乃あはれし序臨の熱乃細は
 まる〜ひらぬぬもなげきもなげきも
 伊勢乃細をなげきもなげきも
 伊勢乃細をなげきもなげきも
 伊勢乃細をなげきもなげきも
 伊勢乃細をなげきもなげきも

無見頂相の出来も感應の終り
 君も女人の萬民時と樂して
 圓滿乃雲のきこ海の邊の分位も
 後のき萬歳の響るる
 西の道直も傳ひの東南も雲落る
 花も春響の山松も
 地と動も鬼の威も
 花も春響の山松も
 地と動も鬼の威も

花も春響の山松も
 地と動も鬼の威も

花も春響の山松も
 地と動も鬼の威も

花も春響の山松も
 地と動も鬼の威も

花も春響の山松も
 地と動も鬼の威も

花も春響の山松も
 地と動も鬼の威も

花も春響の山松も
 地と動も鬼の威も

時の烟子カミコよりカミコの舞カミコ舞教カミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

和光乃あつたあつたカミコの舞カミコ

代乃あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

あつたあつたカミコの舞カミコ

... 此は變じて... 諸の... 變じて... 諸の... 變じて... 諸の...

第一佛成道親見法界草木國土悉

皆成佛 乃性非情皆共成仏

道 轉入し 乃の轉入一也

五十二類も我同性れ涅槃よけり

... 眞如日月の如く... 照らす...

... 圓融無礙の如く... 照らす...

... 目前の諸法者... 圓融無礙...

... 一切の諸法... 圓融無礙...

... 一切の諸法... 圓融無礙...

... 一切の諸法... 圓融無礙...

障とありしと王城さうへ隔障して

東三條の林頭よ暫く飛行し...

... 計の如く... 照らす...

... 照らす... 照らす...

... 照らす... 照らす...

... 照らす... 照らす...

... 照らす... 照らす...

... 照らす... 照らす...

... 照らす... 照らす...

... 照らす... 照らす...

... 照らす... 照らす...

... 照らす... 照らす...

一、...
 二、...
 三、...
 四、...
 五、...
 六、...
 七、...
 八、...
 九、...
 十、...
 十一、...
 十二、...
 十三、...
 十四、...
 十五、...
 十六、...
 十七、...
 十八、...
 十九、...
 二十、...

子魚傳

一、...
 二、...
 三、...
 四、...
 五、...
 六、...
 七、...
 八、...
 九、...
 十、...

まの國の戦い此将衣をよき〜業

あはれ此衣敷のよきせしむるのさす

海敷好の花をよきしむるのさす

よきしむるのさす

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

思ふは人の心入の教をよきしむる

. 私あの人代
 風俗長等種
 源流を
 寫り
 和字の教
 邦を
 細
 高入
 南校
 馬
 入
 自
 入

花の疑ひもあつた花のぬくもあ
我の心もゆるたび給ふ木陰と接れ
宿とまば花のうらみありま

熊野

花前ハナノマヘは蝶舞給マテともかき寄柳ヤナギよヨ寫
とよトヨらラるル金カネ花ハナの清水シズイミはハ随ズイ心シン
香カウ乃ノあアらラるル鐘カネの響ヒビキ雲クモを隔ヘ
くク離リるル愛アイ深シくク清水寺シズイミ
乃鐘カネの聲コエ御園ミヅノ精舎セウカをオあアらラ諸
行無常コトナシ乃ノもモちチやヤ病ヤマト地チをオ控コ現イマの花
のハナもモ必カナラシくク双樹フタツツ乃ノもモ世ヨにニ生ナ者モノ必カナラシ滅ス

乃世ノヨのあアらラるル愛アイ深シくク清水寺シズイミ
もえモエの捨スツ一ヒトよりヨリあアらラるル雲クモのよヨらラるル雲
簀乃スノにニ出デるル名ナをオあアらラるル寺テラきキ桂ケイ乃
橋ハシ柱ハしらをオあアらラるル花ハナをオあアらラるル雲クモ
桜サクラの御園ミヅノ林リン下カ行ユク南ミナミをオあアらラるル
眺シノボまマはハ悲カミ擁護ユウゴの薄震ウソ慈ニギハヤ野ノ控コ現イマ
乃ノうウらラるル名ナもモ同ドウくク今イマもモあアらラるル
稻荷イナの山ヤマ乃ノもモ紅ベニ花ハナのあアらラるル雲クモ
紫ムラサキの秋アキ又マタ花ハナのまマの清水シズイミのあアらラるル雲クモ
頼タノシもモあアらラるル乃ノ花ハナ盛シメ山ヤマ乃ノ名ナ
れレ音ネ羽ハあアらラるル乃ノ花ハナの雲クモのあアらラるル雲クモ

人々も 舞乐的にまじりて

ちよの慈母一指舞入 北元ノ... 海に惜ま入

やまね 中華... あよへ 俄に村雨のつて花の

散るいよま ワキ... ちよの村雨乃あり 露に花

を散るいよま ... 村雨乃あり 露に花

雨の ... ちよの村雨乃あり 露に花

惜まぬ人々も ... ちよの村雨乃あり 露に花

この頃の種を ... ちよの村雨乃あり 露に花

のまも惜まぬ ... ちよの村雨乃あり 露に花

花をぬし ... ちよの村雨乃あり 露に花

眼をぬし ... ちよの村雨乃あり 露に花

ちよの村雨乃あり ... 露に花

あよへ ... ちよの村雨乃あり 露に花

あよへ ... ちよの村雨乃あり 露に花

あよへ ... ちよの村雨乃あり 露に花

あよへ ... ちよの村雨乃あり 露に花

あよへ ... ちよの村雨乃あり 露に花

あよへ ... ちよの村雨乃あり 露に花

あよへ ... ちよの村雨乃あり 露に花

あよへ ... ちよの村雨乃あり 露に花

あよへ ... ちよの村雨乃あり 露に花

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

.....

